



イントロダクション(特集 : タイム・マシンとしての写真 : Photography as Machine-of-Time)

渡邊, 大樹

(Citation)

美学芸術学論集, 18:31-33

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481717>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481717>



イントロダクション

渡邊大樹

Taiki WATANABE

カメラが標準搭載されたスマホを持ち歩き、撮影した写真に加工を施したり、InstagramやTwitterをはじめとする各種プラットフォームにアップロードしたりコメントしたり、このような現状を鑑みるに、わたしたちはかつてないほど写真に取り囲まれている。畢竟、これまで図として存在していた写真は、現在では地としてわたしたちの周りの風景を、さらにはわたしたち自身のセルフイメージ（自己像）をも形作ることになっているのである。デジタル化が加速度的に進行しつつある現代において、写真をめぐる行為とそれに付随する事象は多様化または複雑化を極めている、そういつて間違いないだろう。現代におけるこうした複雑さ極まる写真という媒体を考えるにあたり、その時間上の身分に注目することはひとつの切り口となりうるかもしれない。

長時間にわたる露光によってしかその像を顕わにすることのなかった初期の時代から、ネット上にアップロードされ高速で流通し、循環し、写真が風景化した現代にいたるまで、写真とそれに伴う行為をめぐる時間なるものは、常

に劇的に変化を被ってきた。撮影、現像、流通といった実際上の時間にかぎらず、フォトグラムやスナップ写真や長時間露光による写真や人間なしで撮影された写真など写真制作ないしそれに用いられる媒体の差異によっても生じる時間は異なってくるだろう。あるいは過去の痕跡としての写真が内包する時間、さらには、そうした写真が喚起する人間の情動の次元までも含めて、このような写真が含みもつ時間性を「タイム・マシン」と梓付つつ、この時間性にアプローチする視座を探ること、それが本研究会の趣旨である。

このような問題意識のもと、神戸大学芸術学研究室は第一六回芸術学研究会を「タイム・マシンとしての写真——Photography as Machine-of-Time——」と題し、二〇二二年二月一日に開催した。研究会では当研究室所属の博士課程後期課程一年である渡邊大樹と瀬古知世の二名が発表し、次に、写真とそれに伴う経験や行為や時間、そしてその関係性について新たな視座から研究をおこなっている江本紫織氏と、近著『ありのままのイメージ…スナップ美学と日本写真史』（二〇二二年）において「スナップ」という語を軸に、日本の写真文化の根底にある「スナップ美学」を明らかにし、写真史を再構築した甲斐義明氏が発表を行った。

本特集には、共同討議の模様と研究会での発表をもとにした各発表者の論考が掲載されている。渡邊は「フィリップ・デュボワにおける「行為」と題し、フランスの映像研究者であるフィリップ・デュボワ（一九五二）の著書『写真的行為（『acte photographique』）（一九八三年）において、「行為」という語がどのように使用されているかを分析し、「行為」が単に撮影行為であるだけでなく、人間の知覚行為でもあるということを明らかにした。続いて、瀬古による『「ドライブ・マイ・カー」における往還する行為』では、映画『ドライブ・マイ・カー』（濱口竜介、二〇二一年）が、原作小説の単なる再現ではなく映画オリジナルの要素が加えられ、映画独自の解釈がなされていることに着目した。こう

した観点から、村上春樹の作品のなかで「往還する」行為は何を表しているのかを分析し、そうした「往還する」行為が映画のなかでどのように表現されているかを北海道への旅路などの具体的なシーンやイメージを通じて考察した。そこで明らかとなるのは、「往還」という行為をめぐる映画独自の解釈が施されることにより、本作を「村上春樹的な作品」であると感じさせることになっているということである。江本紫織氏による「写真経験における時間軸——接続と無効化によって形成される「現実」と「自己」では、写真が可能にする「今——ここ」を超えた時間・空間の経験、そこで意識されるのは実際の現実そのものであるとは限らないという問題意識から出発する。そのうえで、写真を撮ること、見ることに関わる複数の時間軸が写真を通して意識される「現実」にどのように作用するのを示し、そして写真が可能にする経験の性質の一端を明らかにした。甲斐義明氏の論文は「アルフレッド・スティーグリッツによる過去（作品）の再編集」では、アメリカの写真家アルフレッド・スティーグリッツ（一八六四・一九四六）の初期の作品である《ベネチアの少年》（別名《ベネチアの浮浪児》（一八九四年）に注目し、この作品が彼の作品の中では「古い」写真であるにもかかわらず、スティーグリッツ作品としての《ベネチアの少年》に「古さ」を示すものはほとんどなく、むしろ一九二〇年代以降の成熟期のスティーグリッツ作品との類似性が強調されることで、《ベネチアの少年》は特定の時間の制約から超越したイメージとして示される。このようにスティーグリッツがその晩年に自身の代表作を組み換えていった過程の分析を通して、芸術写真特有の時間性についての考察が行われた。

本特集に掲載されている共同討議と論考からは、写真が含みもつこのような複数の軸をもつような「時間」をそれぞれの論者の視点からうかがい知ることができ、その結果「時間」の構造や、その操作といった新たな視座が与えられるだろう。本特集が写真における「時間」というものを考える一助になれば幸いである。